

カミングス文庫 歴史と現在

「この文庫の価値は或る博物館の持つ価値であります」(兼常清佐、辻莊一、1926年)と驚嘆しながら、当時の研究員たちが、最初のカミングス文庫の目録(南葵音楽図書館、1925年)を編纂して100年。『南葵音楽文庫蔵書目録(貴重資料)』(1970年)には、カミングス文庫の大半が収録されました。しかし長期にわたって南葵音楽文庫そのものが公開されなかったため、漠然と「貴重な」と言われるばかりの存在になっていました。和歌山で公開された今、より多くの視点から、具体的に、その価値を語れるようになりました。新たな所蔵目録の編纂も進められています。今回のアカデミーでは、幾ばくかのダメージは受けながらも、1世紀余にわたり維持されてきたコレクションの歴史と現在を、複眼的な視座から語りあいました。

カミングス文庫の陣容

(1925年目録による)

手書き資料

音楽書	4点
書簡	4点
楽譜	91点

印刷資料

音楽書	118点
楽譜	241点

音楽関連以外の書籍 39点

総数497冊(資料数474点)

※その他音楽雑誌1冊、1点



▲ヘンデル《メサイア》より「Rejoice greatly」
J.C.スミスによる筆写譜



▲パーセル『イギリスのオルフェウス』(1721)



▲『カミングス文庫目録』1925年
口絵とタイトルページ



William Hayman Cummings

W.H. カミングス (1832-1915)

1838頃～54頃	少年聖歌隊員・オルガン奏者
1855頃～75頃	歌手・指揮者・作曲家
1876頃～1915	教育者・研究者

▲カミング[s]音楽文庫
販売残余図書購入願末
(部分)



南葵音楽文庫アカデミー

南葵音楽図書館の軌跡②「カミングス文庫 歴史と現在」

2025年2月23日 和歌山県立図書館(本館)2階 講義・研修室

photo: 佐本守



佐々木勉
(司会)

美山良夫

林淑姫

篠田大基

カミングス文庫：歴史と現在 ジル＝マルシェックス × 南葵音楽文庫

傍聴記：栗林あかね（玉川大学教育博物館）

2025年2月23日、『南葵徳川音楽塾』では、愛知淑徳大学の白石朝子氏による「ジル＝マルシェックス × 南葵音楽文庫～初来日100周年の年に」（会場およびオンライン）と、昼休憩を挟んで、南葵音楽文庫研究員4名（佐々木勉、篠田大基、林淑姫、美山良夫の各氏、発表順）をパネリストとして『南葵音楽文庫アカデミー 春「南葵音楽図書館の軌跡②カミングス文庫 歴史と現在」』（会場のみ）が開催された。

南葵徳川音楽塾

明治から始まった唱歌による音楽教育は斉唱や輪唱が軸であり、そのような教育を経た者の留学先のほとんどはドイツやオーストリアという時代の中、音楽へのアプローチが大きく異なるフランス人音楽家の来日は、日本人音楽家たちに大きな衝撃と新しい視点を与えた。その人物こそ、アンリ・ジル＝マルシェックス（Henri Gil-Marchex 1894～1970年）である。ジル＝マルシェックスの活動でよく知られているのは、1925年にバロン薩摩として名を馳せた薩摩治郎八（1901～1976年）の支援で初来日した直後に開催された、東京帝国ホテルでの6夜に及ぶ演奏会であるが、白石氏は彼の多才・多彩な活動を交えて、これまでほとんど取り上げられることのなかったジル＝マルシェックスによる日本音楽の研究と日本音楽界への貢献、そして徳川頼貞との関わりが紹介された。ジル＝マルシェックスは、初来日時の帝国ホテルで行われた演奏会そのものにコンセプトを持たせて独自性を帯びた活動を展開。この時代の外国人による演奏会は目に見えて興行的だったことに対し、彼のそれは高尚な印象を与えることに成功、この件に関しては日本の洋楽史上でも言及される。音を間違えないこと、力強いコントロールをよしとした演奏教育を受けていた当時の日本人には強い衝撃で、その後の時代を築く音楽家たちにも少なくない影響を与え、セルフプロデュースに長けていたジル＝マルシェックスの存在そのものがセンセーショナルであった。合計4度にわたる来日の間には演奏活動のほか、講演を含んだレクチャーコンサート、日本人作曲家の作品演奏や日仏音楽同好会の設立にも携わる。頼貞との出会いは、1929年にパリのエコール・ノルマル音楽院での演奏会で、1937年、頼貞が設立に関わった国際文化交流事業機関「国際文化振興会」（1934年設立時、会長は近衛文麿、副会長が頼貞）の援助によって4度目の来日を果たし、翌1938年2月には頼貞を会長、ジル＝マルシェックスを副会長とした「日仏音楽同好会」が設立された。設立に伴って開催された「日仏交換音楽会」（1938年2月25日於華族会館）では松平頼則、池内友次郎、清瀬保仁のほかM.ラヴェル、G.フォーレなど、日仏作曲家の作品が演奏されたが、その後の活動はメンバー内の意見の相違や戦争といったさまざまな理由によって途絶えてしまった。氏によれば、この会は私的ではなく文化人も取り込み大々的な活動を期待されていたため、もし存続できていたのならばその影響は小さくなく、芸術文化の興隆はもとより、南葵音楽文庫閉鎖後における頼貞の音楽活動を語ることができる機会であり、これが失われた



▲ジル＝マルシェックス

ことは残念である。

閉塾後も会場参加者による活発な議論が続けられ、ジル＝マルシェックスと頼貞、また彼らを取り巻く音楽事情を知り、学びを深める時間となった。なお、ジル＝マルシェックスの来日における音楽活動と日本音楽界との関わりについては、氏の博士論文『アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み——4度の来日（1925-1937）における音楽活動と日本音楽研究をもとに——』（2013年、愛知県立芸術大学）に詳しいので、そちらを参照されたい。

南葵音楽文庫アカデミー 春

南葵音楽図書館の軌跡② カミングス文庫 歴史と現在

カミングス文庫は、これまで南葵音楽文庫における講座、レクチャー、アカデミー、音楽塾などで定期的・積極的に取り上げられている資料である。1920年1月に日本に到着し、10月に閲覧が開始、1925年に資料目録として *Catalogue of the W.H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library* が刊行された。その来歴や主要な貴重資料の存在は、和歌山以前においてもある程度までの情報は知られていたし、知ることもできた。だが資料受け入れまでの経緯には誤解や偏見も多く、それらが十分に検証されることなく伝わってしまったことに対して、調査研究に基づいた正確な情報を発信して南葵音楽文庫の再評価に繋げていることは和歌山の地に移ったことで得られた成果である。研究員諸氏は、この地に来たら南葵音楽文庫に集中せざるを得ない。ある意味で雑念にとらわれる間もなく、誘惑に負けにくい、集中できる環境の中で日々、資料と向き合っていることに心服する。全容を掴み取ることが困難であったカミングス文庫のこれまでとこれからを、研究員諸氏それぞれの立場から報告された。

はじめに佐々木勉氏より、南葵音楽文庫におけるカミングス文庫のいきさつが時系列に沿って丁寧に説明された。氏は『南葵音楽文庫紀要』第4号の中で、大変な苦労の結晶として音楽書の目録を掲載されている。近い将来には、これまでの集大成としてすべての蔵書を含めた目録の完成と公開を目指して一層力を注がれるという決意を示された。さらにイギリスにおけるカミングス文庫競売は未だ謎も多く、残る競売の真相についても解明に意欲をみせた。

20世紀音楽を専門とする篠田大基氏は、購入経緯を扱った南葵文庫の報告書や雑誌記事に焦点をあて、どの段階で事実とは異なる情報が出回ったのか、現在までに判明している事実に近い部分まで推察されたのかを比較できる資料を掲示してカミングス文庫をめぐる音楽界の



photo: 佐本守

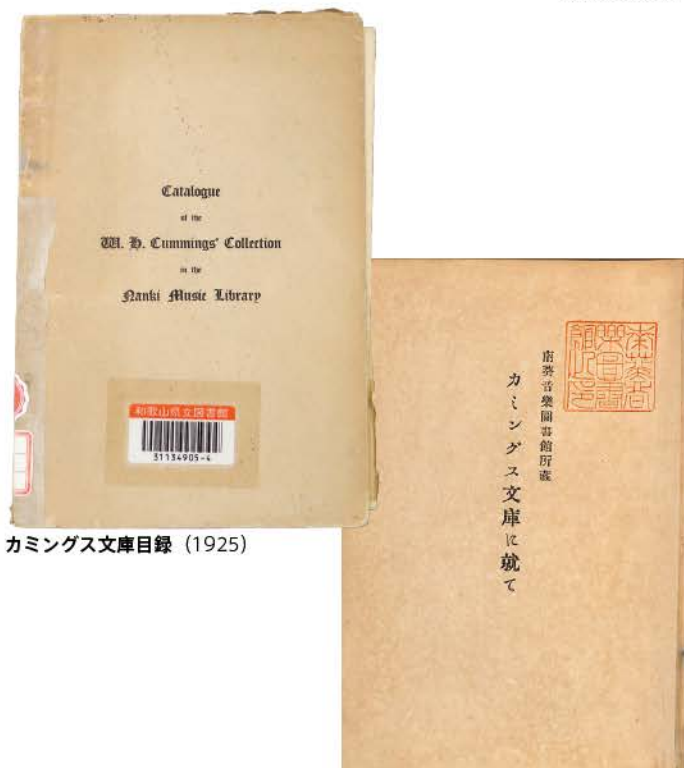
カミングス文庫について

「カミングス文庫」は、19世紀を代表するイギリスの音楽蔵書家ウィリアム・ヘイマン・カミングス（1832～1915年）の旧蔵書の一部で、徳川頼貞が南葵音楽文庫（当時は「南葵文庫音楽部」）の図書充実を図るために購入した貴重書のコレクションであり、南葵音楽文庫の中核となる資料群である。1920年に南葵音楽文庫に到着し、まもなく調査研究及び閲覧が開始されている。

当初、南葵音楽文庫に収蔵されたカミングス文庫の資料数は、1925年に刊行された同文庫の最初の目録 *Catalogue of the W.H.Cummings' Collection in the Nanki Music Library*（南葵音楽図書館）に従えば、必ずしも記載された資料の点数と一致しないが、音楽関連の手稿資料と印刷資料、さらに一般書や雑誌を含めて474点（494冊）である。これらの資料のうち、現在所在が不明のものが10数点あるが、戦時下の混乱などを乗り越えてきたことを考えると、現在でもそのほぼ全体を確認できることは奇跡と言える。

現在、手稿資料は和歌山県立博物館に、そして印刷本の音楽書および楽譜は、同図書館に収蔵されている。

（佐々木勉）



カミングス文庫目録（1925）

カミングス文庫に就て（1926）

カミングス文庫購入の経緯について

徳川頼貞のカミングス文庫の購入については、これまで、イギリスの競売で頼貞がアメリカ国会図書館と競り合い、ついにコレクションを折半したという逸話が語られてきた。しかしこれは真実ではない。文献を辿ると、この逸話が登場するのは戦後間もない1948年頃からのようである。おそらくは、頼貞が著書『薈庭楽話』（私家版1941年／市販版1943年）に書いた、彼がアメリカ国会図書館を訪れた際の発言がもとになり、それが誤解、脚色されて、折半購入という話に変わってしまったようだ。

カミングス文庫購入当時の資料に記された購入の経緯は全く異なる。1918年と1920年の『南葵文庫報告』によれば、頼貞はカミングス文庫の競売に参加していない。さらに、南葵音楽文庫関連資料から発見された文書「カミング〔ス〕音楽文庫競売残余図書購入頼末」の記述も、これを裏付けている。

「偶々本年〔1917年〕五月「ミュージカル・オピニオン」誌上に於て、該文庫競売の儀記載しあるを知り、其一部分にても当南葵文庫音楽部に収蔵せんことを欲せり、因て在英旧師博士ネラー氏に電文を發し該文庫蔵書購入を依頼す。然るに其後到着せし音楽雑誌上には既に五月十七日より同月廿四日迄の期間に於て、競売終了の旨記載しあるを以て再び博士に電送し購入棄権を告ぐ。やがて八月下旬博士より來翰、競売終了とは雖も尚ほ有価値なる音楽作品、音楽参考資料等残余物多く且つ希望者に依れば売却すべき旨をも報ぜらる。」

（全文は『紀要』第1号に掲載）

つまり頼貞は、カミングス文庫の競売で落札されずに差し戻された書物を、遺族から買い取ったことになる。しかし、現在の南葵音楽文庫に収められているカミングス文庫にはそればかりでなく、別の落札者が取得したはずの書物も収蔵されていることが、和歌山での調査を通じて判明した。カミングス文庫購入の経緯に関しては、依然として謎が残っている。

（篠田大基）



兼常清佐とカミングス文庫研究

カミングス・コレクションがロンドンから南葵文庫に届けられたのは1920（大正9）年1月であったが、コレクションの本格的な整理の完了は5年後のことになった。整理には辻莊一（1895～1987年）とともに兼常清佐（1885～1957年）が当たった。兼常は1924年に2年間のベルリン留学から帰国したばかり。留学中にプロイセン国立図書館をはじめドイツ各地の図書館、博物館を視察していた兼常にとって評価のさまざまな資（史）料からなるこのコレクションを解析し、その意義を問うことは魅力的な仕事だった。成果は、1925年12月に刊行された所蔵目録*Catalogue of the W.H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*と翌年1月の解説書『南葵音楽図書館所蔵 カミングス文庫に就て』としてまとめられた。前者に示される資料整理法は当時の欧米における音楽資（史）料の標準的な目録法に基づき、分類は南葵文庫音楽部の分類表（1920年版）に拠った。分類記号は排架記号を兼ねていたものと推測される。アイトナーやフェティス、リーマンの辞典類をはじめとする参考文献を駆使して作成された「目録」によって、資料総数454点（『目録』序文による。目録件数474件）の内容が明らかにされ、続いてコレクションの内容を分析し、その特徴を述べた解説書が上梓された。兼常は担当した音楽書の分析を書物の言語から迫った。蒐集者カミングスが英国人であり、英語の書物が多くを占めることに注目したからであろう。既に重要文献として名高い歴史的名著よりは、むしろその蔭に隠れて「大抵の歴史家は閑却して顧みない様な」英語の書物を取り上げ、音楽史の裾野を広げようとする。兼常清佐の音楽史観を示すものといえよう。（林淑姫）



兼常清佐（かねつね・きよすけ）
1953年頃 田村茂撮影
『素顔の文士たち』
（河出書房新社、2019.11）より



貴重資料のデジタル化と修復

慶應義塾大学 DMC 機構

貴重資料手稿部分（ほぼ全てがカミングス文庫）のデジタル撮影を、2006年8月から2010年9月にかけて実施。撮影作業は、カメラ操作1名、資料保持2名、画像確認1名の4名体制を基本に、収蔵場所に出向き、仮設の撮影用ブースを作って進めた。撮影のためにはページを大きく開かなければならないが、開くと本の背が割れてしまいかねない資料も少なくなかった。資料を破損せぬように注意しつつ、1カットずつ、ページが平らになっているか、焦点が合っているかなど、確認しながら撮影できるのは1日100カット程度。4年間の作業で、撮影対象に選んだ『蔵書目録（貴重資料）』採録の手稿99点のうち47点と関連資料7点、合計3,204カットを撮影した（画質：2,200万画素、保存形式：RAW、JPEG）。DMC機構ではこのほかに、貴重資料を収録したマイクロフィルムのデジタル化も行った。（篠田大基）



カメラによる高精細画像収録
（慶應義塾大学 DMC 機構 / 2006）

読売日本交響楽団

公益法人制度改革の施行（2008年）により、読売日本交響楽団は公益財団法人へ移行（2012年4月1日）。演奏活動に加え「南葵音楽文庫コレクションの保存及び公開」が公益事業として認定された。これに伴い次の3事業がスタート。①デジタル化継承（3年計画）②文庫の公開（寄託さき検討）③刊本ふくむ貴重資料の修復

2012年6月、大型スキャナー 2台を導入し作業開始。2014年7月にデジタル化完了。慶應DMC機構と併せ画像点数は1万余。収録画像は現在、南葵音楽文庫閲覧室PCで見ることができる。

なお、2015年に読響は貴重資料の修復に着手。Conservation for Identity社（埼玉県）に委託し継続中。（美山良夫）



非接触型ラインスキャナー「Book Eye III」
（ドイツ製・クレイドル装備）
高速・高精細で習熟も容易。
音楽学専攻大学院生が作業に従事した。



編纂進行中のカミングス文庫の新目録

現在編纂が進められているカミングス文庫の新目録は、すでに「音楽書」編が公開されている。

cf. 佐々木勉『南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究 ―その沿革とカミングス文庫「音楽書」目録』南葵音楽文庫紀要第4号（2021, 和歌山県立図書館）p.15-24およびp.72-85。なお、紀要は県立図書館Webで閲覧およびPDF形式のダウンロードが可能。
(<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/publications/>)

そしてまもなく、続編となる「印刷楽譜」編も刊行される（南葵音楽文庫紀要第8号〔2025〕収載予定）。

これらの新目録が、これまでに刊行された1925年及び1970年の目録と最も大きく異なるのは、合本中の資料も、今日も使用されている1970年に刊行された『蔵書目録（貴重資料）』（大木コレクション・南葵音楽文庫）における請求記号に下位番号を付加して、作曲者や著者のアルファベット順に個別に掲載されている点である。また、来歴に関する、カミングスに至るまでの旧蔵者の署名や蔵書票についての情報も明記されている。

なお、新目録に記載された資料数は、カミングス文庫が南葵音楽文庫に収蔵された1920年以降に失われた資料（14件）を除いて、音楽書が122件、印刷楽譜が同2件を除き438件である。（佐々木勉）

カミングスのサイン
(M-1/19から)



カミングス蔵書票



価値再考

音楽資料の蒐集家の中でもカミングスが際立っているのは、彼が英国の愛書家（bibliophile）の伝統や矜持を堅持していた点にある。ヴィクトリア朝は書物愛（bibliophilia）黄金時代。その威光や香りを留め、それが音楽研究者である彼の探究や音楽家として活動の足跡と絡みあう。このようなコレクションは唯一無二である。

カミングス文庫の価値は、むしろ第一義的には資料とその内容にある。貴重な第一次資料の宝庫であり、唯一本（unicum）にも事欠かない。それとともに、その内容の外包、つまりモノとしての書物、その諸要素も魅力に溢れる。『南葵音楽文庫案内』（中央公論新社、2021年）では、「書物の悦楽」と「行方知れずの資料」の項で、蔵書印、蔵書票、装幀に見る文化史、愛書家の誇りであるインキュナブラ所蔵の例をあげた。蔵書印をのぞき、カミングス文庫の価値形成において一翼を担っている。

収蔵されている印刷楽譜の出版時期は4世紀に及ぶ。活版、銅版をはじめ、技巧的な組版、二色刷りなど印刷技術そのもの、加えて用紙、綴じ、サイズ、記譜法、見開いたときタイトルページの左に現れる口絵（frontispiece）、タイトルページ内に添えられた飾り絵（vignette）等々、コンパクトな楽譜印刷博物館の観を呈している。

価値の在処は広がる。シュテファン・ツヴァイク、アルフレド・コルトーといった芸術家による珠玉のコレクションには、カミングス旧蔵と明記された資料を含む。そこには別格ともいえる蒐集の先達への尊崇も滲む。その象徴的価値を徳川頼貞も気付いていた。



S.ツヴァイク(1881-1942)
背後にネウマ譜

カミングス文庫を前にするとき、手に取るときに沸き上がる静かな高揚感、それは「昨日の世界」に広がる文華豊穡の海への船出、あるいは熟れた果実からしたたる雫のテイスティングへの期待から。

Ex Libris Cummings：その響きは美しく厳か。その蔵書票は奥津城への護符であるかのよう。（美山良夫）



動きをあらわし、聞き手に対してそれらが与えた影響を推察することを委ねられた。著名な評論家でも当事者（この場合は頼貞や南葵（音楽）文庫の刊行物）から裏付けをとらない、十分に確認されないままの文章が公表されていることを皮肉るとともに、そちら側に陥らないよう情報は正確に、丹念に扱わなければならないと襟を正された。

美山良夫氏は、慶應義塾時代とそれに続いて和歌山で行われた南葵音楽文庫のデジタル化について、実際の作業を請け負った篠田氏の補足を交えてその着手の理由から詳細に話された。今後の音楽界を見据え、守り発展させる、継承させる価値があるものの、さまざまな理由から日の目をみない扱いであった南葵音楽文庫に光を当て、和歌山までの筋道をつけさらには将来への希望を発信し続けるそのバイタリティに感服させられる。

これまでカミングス文庫については、入手経緯やその後の処遇、文庫内の重要（注目）資料に関する発表が多くあったなかで、林淑姫氏は、従来ほとんど言及されて

こなかった1925年に刊行された目録そのものの構成と解説文に着目された。また同時に、この目録を担当した兼常清佐（1885～1957年）と辻莊一（1895～1987年）それぞれの人物像にも着目し、彼らの個性が目録作成に及ぼした影響や、同時代のほかの目録との相違比較にも言及された。大きなものの底にある小さな研究の積み重ねに思いを馳せる、兼常らへの愛が感じられる発表であった。

全体を通して、それぞれの視点からカミングス文庫の価値再考を改めて訴えた時間であったことが最も強い印象である。「歴史の積み重ね」「五感で感じる南葵音楽文庫」「ワクワクするその気持ち」が、興味を持つ人ひとりでも多くへ届けられるように地道な調査研究を積み重ねておられる方々に対し、何よりこの和歌山の地から南葵音楽文庫への暖かいご支援とご協力を得られ発展していくことに一層期待したい。（栗林あかね）

日本人による「第九」 初演 100年 使用楽譜など所蔵資料を公開

2024年11月2日(土)から12月26日(木)まで、和歌山県立図書館 南葵音楽文庫 閲覧室を会場に標記の展示がおこなわれました。下記の5パート構成で、とりわけ②は初公開。100年前の初演で使用された楽譜が、貸し出した南葵文庫に返還され、残されていたことが明らかになり、主要紙全国版の記事にもなりました。

①「第九」総譜（スコア）

初版初刷り楽譜（マインツ、1826年。カミングス文庫）、自筆楽譜ファクシミリ版（正写版、ライブツィヒ、1924年）ほか。

②日本人による初演「第九」使用楽譜

初演（1924年11、12月）で使用されたパート譜。南葵文庫音楽部貸出。ブライトコプフ・ウント・ヘルテル版、および東京の本郷三丁目にあった高井楽器店の五線紙を用いた写譜が混在。当時の演奏の様子や技術、使用楽器の様態を伝えています。

③徳川頼貞と「第九」

④「第九」の前後 演奏者たち

⑤「第九」初演をめぐる

※展示リストと簡単な紹介リーフレット（4ページ）は和歌山県立図書館「南葵音楽文庫」ウェブサイトでご覧いただけます。

【関連報道】

◎100年前日本人初演「第九」の楽譜 紀州の「音楽の殿様」収集資料から発見（毎日新聞2024.12.17朝刊）

◎日本人の「第九」初演奏 南葵音楽文庫で発見（読売新聞2025.2.5朝刊）



「紀州音楽講座」を開催

南葵音楽文庫サポーターの有志が、和歌山城ホールの会議室を会場に4回にわたり講座を開催。講師はサポーターのひとりでもある泉健氏（和歌山大学名誉教授）。



①「オーケストラの楽器：ヴァイオリン、フルート」（2024年10月20日）

②「ピアノという楽器の歴史：サントゥール、カーヌーンからピアノへ」（10月27日）

③「ピアノ奏法の歴史：フォルテピアノからモダンピアノへの変遷に注目して」（11月3日）

④「バロック唱法とロマン派唱法の違い：オペラホールの広さに注目して」（12月1日）

日曜日午後の講座で、各回とも詳細な資料が配付され、熱心な受講生が集っていました。なお、南葵音楽文庫サポーターは、毎月第3日曜日に県立図書館で月例会を開催しています。

南葵音楽図書館開設100年、頼倫没後100年

1925年は南葵音楽文庫の歴史にとって、また紀州徳川家にとって重要な、また大きな変化の年でした。頼倫は、和歌浦や湯崎で療養、4月から宮内省に出勤。5月18日夜に胸痛を覚え、同夜代々木本邸で急逝。26日に告別式を済ませると、同日夜に柩は東京駅を発ち翌日夕刻に下津に着き、長保寺堂内で公衆の供養を受け、6月3日に埋葬されました。

7月1日に爵位を継いだ頼貞は、10月に南葵音楽事業部、その附属機関である南葵音楽図書館を開設しています。12月から翌年1月にかけて、カミングス文庫の目録、『南葵音楽図書館所蔵カミングス文庫に就て』があいついで刊行されました。

当時の報道によれば、麻布の本邸敷地の売却交渉、関東大震災で損壊した南葵楽堂の復旧計画なども同時に進行していました。

南葵文華第12号

令和7年3月31日発行

発行所

和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集

合同会社芸術資源研究所

〒600-8439 京都市下京区坂東屋町261-2-1001

編集協力

有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36